

第5学年1組 国語科学習指導案

分科会Ⅲ 指導者 溝上 剛道

1 単元名 優れた表現から人物像をとらえ、『プロフェッショナル—大造の流儀—』を創ろう（「大造じいさんとガン」光村図書5年）

子どもたちはこれまでに、登場人物の相互関係や心情の変化、物語の全体像を具体的に想像する力を身に付ける学習を経験してきている。その中で、「学習課題」の達成に向けて粘り強く「わたしの問い」の解決に取り組み、複数の叙述を関連付けながら考えを広げ深める姿が見られるようになってきた。しかし、登場人物の人物像については、会話や行動を基に「性格」という側面では捉えられはするものの、その人物の「ものの見方や考え方」にまで考えを巡らせ、「性格」と「考え方」を総合して判断できている子どもは少ない。

そのような子どもたちに、本単元では「大造じいさんとガン」と出合わせる。本作品は、豊かな描写によって、中心人物の心情や性格、そしてものの見方や考え方の変化が描かれている。それらの優れた表現や物語の展開と結び付けながら、ものの見方や考え方の変化を捉え、人物像を具体的に想像する力を身に付けていってほしいと願う。

そこで、本単元では『プロフェッショナル—大造の流儀—』という言語活動を核にした単元を構想する。この言語活動に取り組む中で、言葉による見方・考え方を働かせながら、粘り強く人物像について自分なりの考えを創り出す「深い学び」を生み出していく。

2 単元について

(1) 本単元では「大造じいさんとガン」を学習材として取り上げる。行動や会話、様子を表す叙述を関連付け、性格や考え方を総合して人物像を具体的に想像する力の育成をねらう。

本学習材は、前書きと本文から構成され、本文は「1」～「4」の典型的な起承転結の展開となっている。「1」では、大造じいさんは残雪を「いまましい」「たかが鳥」と見ていたが、残雪にことごとく作戦を見破られ、狩りが失敗におわることによって、大造じいさんの残雪に対する見方は少しずつ変化していく。さらに「3」のおとり作戦決行中、突如現れたハヤブサに立ち向かい、傷を負ってもなお毅然とした態度で自分の前に立つ残雪の姿を目の当たりにし、「ただの鳥に対してのような気がしない」とその見方が大きく揺り動かされる。そして「4」では、残雪に対して「ガンの英雄」「えらぶつ」などと呼びかけているように、大造じいさんが残雪を自分のよきライバルと認め、清々しい気持ちで去りゆく姿を見送っていることがうかがえる。これらの叙述に象徴される大造じいさんのものの見方や考え方の変化を捉えていくことで、一面的な性格ではなく、物語全体から総合的に判断した人物像を具体的に想像することができる作品だと言える。

そのような学習材の特徴を生かし、本単元では人物の生き方に迫るドキュメンタリー番組『プロフェッショナル—大造の流儀—』を創るという言語活動を核にした単元を構想する。

(2) 子どもたちはこれまでに「なまえつけてよ」「たずねびと」を学習材とした単元において、登場人物の相互関係や心情の変化、物語の全体像を捉える力をつけてきている。本単元で優れた表現に着目して人物像を具体的に捉える学習は、6年「帰り道」での視点の違いに着目して人物像を捉える学習につながっていく。

(3) 本単元に関する子どもの実態は、次の通りである。（調査人数：36人）

① 登場人物の心情については、全員が問いを立て、その解決に取り組むことができる。しかし、複数の叙述を関連付けて考えることを苦手とする子どもが4人ほどいる。

② 多くの子どもが会話や行動から「やさしい」などの平易な言葉で性格を捉えることはできるが、それらの言動から人物のものの見方・考え方まで想像できる子どもはまだ少ない。

(4) 指導にあたっての留意点は、次の通りである。

- ① 単元導入では、実際のテレビ番組「プロフェッショナル」で特集された人物や、「白いぼうし」(4年)の松井さんを例に、体験的に「語り」「人物像を表す言葉(黒背景に白文字※以下『黒ポン』)」をつくるための問いの解決に取り組ませながら、教師作成のモデルを提示する。その過程を基に、「人物像をとらえる」という身に付ける力と「言動や描写、人物が見ているものの表し方を関連づける」という思考操作を共有し、単元の学習課題を設定する。
- ② 「わたしの問い」を立てていく際、学習課題の「身に付ける力」を意識させることで、単なる「行動の理由」や「心情」についての問いではなく、それらが人物の性格やものの見方・考え方を捉えていくことにつながる問いかを考えられるようにする。
- ③ 第二次では「語り」「黒ポン」を作るための「わたしの問い」を立て、問いの解決に取り組んでいく。その際、「語り」については、大造じいさんのものの見方・考え方の変化を捉えられているか、それらを関連付けて「黒ポン」で人物像を表現できているかを見取っていく。その中で、グループでも解決できない困りごとについては全体で取り上げ、どう解決するかを話し合わせることで、個々の「言葉による見方・考え方」を表出させていく。
- ④ 本時では、前時まで「黒ポン」につながる「語り」を作るための問いを解決する中で、「ひきょうなやり方」「堂々と」について考えの違いが生じているグループを取り上げる。全体でその問いについて解決する中で、大造じいさんの残雪に対する見方や狩りに対する考え方の変化と関連付けて考える姿を価値づけ、学習課題の思考操作を具体化していく。

3 単元の目標

- (1) 登場人物の人物像を想像する際に、語感や言葉の使い方に対する感覚を意識して、語や語句を使うことができる。
- (2) 登場人物の行動や会話、様子などを表している複数の叙述を基に、性格やものの見方・考え方などを総合的に判断して、人物像を具体的に想像することができる。
- (3) 人物像を表す言葉や感じたことや考えたことを伝え合う言葉などがもつよさを認識し、国語の大切さを自覚して思いや考えを伝え合おうとする。

4 指導計画(8時間取り扱い)

学習活動	主体的・対話的で深い学びを生み出すための教師の支援	時間
1 単元の見通しをもつ。	○「プロフェッショナル」の映像やモデル文を基に「身に付ける力」「思考操作」を確かめて「学習課題」を設定する。 会話や行動、描写を関連付けて、人物像をとらえ、「語り」と「黒ポン」で「狩人 大造じいさん」の生き方を伝えよう。	1
2 「わたしの問い」を解決しながら、『プロフェッショナル—大造の流儀—』を創る。	○ 初読時の「黒ポン」を書かせ、それを具体化していく見通しをもって問いを立てられるようにする。 ○ 問いの解決の中で着目した描写等を基に「黒ポン」を見直させ、学習課題を意識した振り返りができるようにする。 ○ 「語り」や「黒ポン」を作る中で生じた困りごとは全体で取り上げ、どう解決するかを話し合わせる。その中で働かせた見方・考え方を価値づけ、言語活動の再考を促す。	本時 6 6
3 学習課題の達成度を振り返る。	○ 人物像を想像する適用課題に取り組ませ、単元で身に付けた力を振り返れるようにする。	1

5 本時の学習

(1) 目標

大造じいさんにとっての「ひきょうなやり方」について話し合うことを通して、各場面の叙述と関連付けてその意味を問い直し、「語り」や「黒ポン」の記述を再考することができる。

(2) 展開

時間	学習活動	子どもの思い・姿
5	1 前時までにつくってきた『大造の流儀』を振り返り、本時の見通しをもつ。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 前回まで「語り」をつくってきたけど、「ひきょうなやり方」で意見が分かれていたよね。 ○ そもそも言葉の意味と、大造じいさんにとっての「ひきょうなやり方」で捉え方がずれていたんじゃないかな。
20	2 残雪や狩りに対する大造じいさんの考え方について話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> ○ だとすると、「大造じいさんにとっての『ひきょうなやり方』」だったら、どのように「語り」を書いていくといいだろう。 ○ 大造じいさんが「ひきょうなやり方」と言っているのは、「おとり作戦」自体ではなくて、その作戦中にはやぶさが現れて、傷を負っている状態の残雪を打つことなんじゃない？ ○ 大造じいさんは狩人として残雪に挑んでいるんだから、鉄砲を使ったり、いろんな作戦をしかけたりすることは「ひきょう」ではないよ。 ○ それに、「また堂々と」と言っているんだから、大造じいさんはこれまでも堂々と戦ってきたと思っているってことだと思うな。 ○ あの時残雪の「いかにも頭領らしい、堂々たる態度」を見て、大造じいさんはただの鳥に対しているような気がしなくなったよね。
15	3 「4」と「1」～「3」場面の叙述を関連付けて、「語り」や「黒ポン」の記述を再考する。	<ul style="list-style-type: none"> ○ そうそう。それで、残雪を「英雄」「えらぶつ」と呼ぶくらいその存在を認めて、倒すなら自分の力で倒したいって思ったんじゃないかな。 ○ そうか。だったら、「語り」に書いていた問いの答えを見直した方がよさそうだね。 ○ 結びの「いつまでも、いつまでも…」のときの、大造じいさんの残雪に対する見方を書き換えてみよう。 ○ 残雪に対する見方だけでなく、狩人という仕事への向き合い方も変わったと言えるよね。そうすると、「黒ポン」も変えたほうがいいな。
5	4 学習課題を基に、本時の学習を振り返る。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 今日は自分の思う「ひきょう」と大造じいさんにとっての「ひきょう」の違いが、それまでの言動や描写とつなげると分かってきた。次は、大造じいさんの残雪に対する見方や狩りに対する考え方を関連付けて『大造の流儀』を完成させたい。



前時では「ひきょう」の捉え方で困っていたグループに寄り添い、全体で話し合う場を設けましたが、複数の視点が混在し、解決に至っていません。そこで本時では、それらの視点を整理し「物語の中での意味」として捉え直しながら、「語り」や「黒ポン」を再考する学びを生み出していきます。

主体的・対話的で深い学びを生み出すための教師の支援（発問・指示，教材・教具，評価）

- 前時で、なぜ「ひきょうなやり方」の捉え方に違いが生じていたのかを振り返らせる。その中で「辞書的な意味」「自分にとっての意味」などの視点を整理しながら、本時では「物語の中での意味」として捉え直す学びを生み出していく。

大造じいさんにとっての「ひきょうなやり方」を、どう語ればよいだらう。

- まずは、第1場面の「うなぎつりばり作戦」、第2場面の「タニシばらまき作戦」、第3場面の「おとり作戦」のそれぞれの作戦についてどう考えるかをグループで話し合わせ、具体的な作戦の内容を土台にして検討できるようにする。
- 「ひきょう」と考える理由としては「わなをしかけている」「鉄砲を使っている」「おとりを使っている」などを挙げると考えられる。それらの発言に対する「〇〇はひきょうじゃないよ」等のつぶやきを取り上げ、「ひきょうではない」と考える理由を引き出していく。
- 「ひきょうではない」の根拠として、第3場面の「鳥とはいえ、いかにも頭領らしい、堂々たる態度」「強く心を打たれて、ただの鳥に対してのような気がしませんでした」などの描写を根拠に挙げる子どもの考えや、第4場面の「おれたちはまた堂々と戦おうじゃないか。」という大造じいさんの会話の中の「また」という言葉に立ち止まっている子どもの考えは、大造じいさんのものの見方・考え方との関連付けにつながる。そこで、それらの叙述に立ち止まっている子どもの考えを取り上げた上で、「自分たちのグループの『語り』や『黒ポン』のどの部分を書き換えられそうか」を問い、それまでの全体での話し合いを基に、グループで台本シートの記述を再考する見通しについて話し合わせる。
- 「語り」や「黒ポン」を再考していく際に、関連付けた会話や行動を書き換えたり書き加えたりしている子どもを見取り、価値づけていく。また、必要に応じてどの会話や行動と関連付けたかを個別に問いかけたり、グループ内でそれぞれがどの会話や行動、描写などと関連付けて「語り」や「黒ポン」を再考したかを話し合わせたりしていくことで、思考操作の自覚化を促していく。
- 「学習課題」の「身に付ける力」「思考操作」を視点として、人物像に対する考えに変化があったか、それはなぜかを振り返らせる。その記述から、どの言葉に着目し、どんな言葉で表現したか（語彙）、どの言葉とどの言葉を比較したり関連付けたりしているか（思考過程）、次はどんな問いを解決しようとしているか（自己の学習の調整）を見取る。「十分満足できる」状況の子どもは全体で紹介して次時の見通しをもたせるとともに、「努力を要する」子どもには個別に関わり、問いの解決過程で線を引いた叙述を問うたり、「問いの一覧」を参考にして次時の見通しを考えさせたりしていく。

【教材・教具】

- 全文プリント
- 台本シート

【評価】

各場面の叙述を関連付けて人物のものの見方・考え方を捉え直し、「語り」や「黒ポン」の記述を再考することができる。
(台本シート，振り返り)